

ISSN 1880-6430

青山スタンダード論集

第8号

2013年1月

青山学院大学
青山スタンダード教育機構

『青山スタンダード論集』投稿規定

1. 本『青山スタンダード論集』は毎年1回発行する。
2. 投稿は原則として本学専任教員とする。但し、編集委員が認めた場合はこの限りではない。
3. 論文内容は未発表のものに限る。
4. 原稿の提出は完成原稿とし、和文100枚以内（横書400字）、外国語50枚以内（A4判1枚 1行約60字（半角） 1枚30行）とする。
5. 和文による論文には外国語のタイトルを付し、500語程度の外国語の要旨を添える。外国語による論文には1000字程度の和文の要旨を添える。
6. 論文は各年度とも9月下旬に締切る。
7. 論文の掲載は投稿論文数その他の事情によって、次年度に繰り越す場合もある。その場合は編集委員と投稿者の協議による。また、特殊印刷を要する論文の掲載を認めた場合、その印刷費の超過分は原則として執筆者負担とする。
8. 内容に触れない体裁の統一、活字指定、掲載順序の決定等は編集委員が行う。
9. 執筆者校正は2回とし、所定の期間内に行うものとする。著しい遅れ、および原稿にない加筆・訂正による印刷費の超過分は執筆者負担とする。
10. 執筆者には別刷50部を無料で進呈する。それ以上を要する場合は執筆者の実費負担とし、必要な部数を投稿締切日までに申し込むこと。
11. 『青山スタンダード論集』に関する事務は青山スタンダード教育機構室において扱う。

付 則

- 1) 本規定は2005（平成17）年4月1日から施行する。
- 2) 本規定の改廃は編集コンビーナが発議し、青山スタンダード教育機構会議の承認を得なければならない。

編集委員

宋 少 秋
高 砂 民 宣

青山スタンダード論集 第8号

2013年1月10日 印刷
2013年1月16日 発行

青山キャンパス 〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25
相模原キャンパス 〒252-5258 神奈川県相模原市中央区淵野辺5-10-1

発行者 青山スタンダード教育機構
機構長 長谷川 信
印刷所 三美印刷株式会社

目 次

教育の部

フレッシュャーズセミナー（2012 年度前期）	遠藤光暁	（ 3 ）
青山スタンダード「経済学 A」で WebClass を活用して	秋場勝彦	（ 15 ）
「命」を考える教育	荻野美恵子	（ 27 ）
大学授業科目の課題レポート ——「文化人類学 A」での採点結果とその分析——	片上英俊	（ 41 ）
対話を通して見る文化 ——上級日本語会話クラスにおけるインタビュー活動の実践——	齋藤祥恵	（ 57 ）
英作文におけるコーパス使用に対する日本の大学生の反応	佐竹由帆	（ 69 ）
教養として学ぶ弁論術	佐藤拓司	（ 79 ）
「英語スキル I」授業報告：CALL 教室でのフロー体験	鈴木聡子	（ 91 ）
「日本語中級 A」教育実践報告	土屋菜穂子	（ 101 ）
男女別学論の現在 ——「自己理解（総合科目）」授業ノート——	友野清文	（ 119 ）
選択を通じた新たな経済学へのアプローチ ——問題解決の指針を与える——	藤森裕美	（ 145 ）

研究の部

- TOEFL-ITP, SILL, 英検 CAN-DO LISTS を用いた英語熟達度と言語学習
 戦略及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的
 研究 (2012)……………木村松雄, 遠藤健治…(161)
- いわゆる “Flat Earth” 問題とその影響……………中園嘉巳…(189)
- 宮崎駿作品における音声をめぐって……………日置俊次…(203)
- Cross-National Comparison of the Dimensions and Structure of Religiosity:
 Japan, Germany and Sweden……………Kazufumi Manabe…(251)
- ラルフの凱旋の意味するもの
 —William Morris, *The Well at the World's End* について
 ……………室住信子…(285)
- Exploring Issues of Feminine Space in Naruse……………Marc Menish…(299)

Contents

Educational Papers

- Seminars for Freshmen, First Semester, 2012·····Mitsuaki Endo···(3)
- Using WebClass for Our Academic Program : Economics A
·····Katsuhiko Akiba···(15)
- Education to think about “life”·····Mieko Ogino···(27)
- Term paper assignment: an analysis Of Its score distributions In “Cultural
Anthropology A”·····Hidetoshi Katakami···(41)
- Analyzing Culture through Talking
—— An Interview Activity in Advanced Japanese Language Class ——
·····Sachie Saito···(57)
- Japanese student attitudes toward corpus use in English writing
·····Yoshiho Satake···(69)
- Oratorical Education as the Liberal Arts·····Takuji Satoh···(79)
- A Report on English Skill I : Flow Experience in a CALL Classroom
·····Satoko Suzuki···(91)
- An Educational Practice of “Intermediate Japanese A”
·····Naoko Tsuchiya···(101)
- Current Debates on Single-sex Education —A Note for “Self-
Understanding (coordinated course)”
·····Kiyofumi Tomono···(119)
- Approach to the new field of Economics·····Hiromi Fujimori···(145)

Research Papers

A Longitudinal Study Focusing on the Progress of Different Kinds of Groups in Terms of their English Proficiency, Learning Strategies and Consciousness of Learning Using the TOEFL-ITP, the SILL and the Eiken Can-Do Lists (2012).....Matsuo Kimura, Kenji Endo... (161)

“Flat Earth” Errors and their effects in Japan.
.....Yoshimi Nakazono... (189)

Hayao Miyazaki, sa méthode pour créer la voix.....Shunji Hioki... (203)

Cross-National Comparison of the Dimensions and Structure of Religiosity: Japan, Germany and Sweden.....Kazufumi Manabe... (251)

On Ralph's Pilgrimage in *THE WELL AT THE WORLD'S END*
.....Nobuko Murozumi... (285)

Exploring Issues of Feminine Space in Naruse.....Marc Menish... (299)

教育の部



フレッシュャーズセミナー（2012 年度前期）

遠 藤 光 暁

1. はじめに

この文では 2012 年度前期に行ったフレッシュャーズセミナーの状況を報告する。私は『青山スタンダード論集』第 5 号（2010 年 1 月発行）で 2009 年度前期のフレッシュャーズセミナーの実践報告を行った。その後も、真田信治『方言の日本地図』（講談社 α 新書）や大島正二『漢字伝来』（岩波新書）や落合淳思『甲骨文字を読む』（講談社現代新書）や大西克也・宮本徹『アジアと漢字文化』（放送大学教材・日本放送出版協会）や唐詩などを教材として、数ページを各学生が分担してパワーポイントで発表するというプレゼンテーションとディスカッションを主とするセミナーを行なってきた。いずれもよい効果を挙げることができたが、今学期は新たな段階に到達し得たように感じたので、ここで改めて報告することとしたい。

今学期の特筆すべき点は、GIS によって学生たちが言語地図を描くという課題を出したのだが、初回としては上乘と言ってよい出来となった。また、質疑応答がたいへん活発で、ようやくディスカッションと称することができるくらいになった。

2. 授業の概要

当初は井上史雄『日本語は年速一キロで動く』（講談社現代新書）を教材にする予定だったが、品切れ中とのことで、急遽徳川宗賢編『日本の方言地図』（中公新書）に変えた。これは 2009 年度前期の教科書と同一のものである。

4 月の第 1 回の授業で教室に行ってみると驚いたことに入りきらないほど学

生が集まっていた、とにかく廊下にいる学生には中に入ってもらった。それでも、立ち見だけでなく地面に座る学生まで現れる状況だった。定員は 30 名までということなので、選抜するため受講動機と「やる気度」を 5 段階で自己評価して書いてもらった。また、次週からはすぐにプレゼンを始めるので、それが担当できる学生は残ってほしい、と言ったら、そういう学生たちだけで既に 27 名いた。そこで、残った学生たち全員のほか、特に「やる気度」が高い学生を入れて、34 名を選抜した。本来の定員上限の規定より 4 名オーバーだったが、この熱気にほだされたわけである。その内訳は、文学部英米文学科 4 名、フランス文学科 9 名、比較芸術学科 2 名、経済学部経済学科 5 名、現代経済デザイン学科 2 名、法学部 5 名、国際政治経済学部国際政治学科 1 名、国際コミュニケーション学科 2 名、総合文化学科 3 名、教育人間科学部心理学科 1 名で、女子 23 名、男子 11 名であった。

第 2 回の授業の冒頭には「他己紹介」を行った。座席を円状に並べ替え、2 人ずつペアになって数分ずつ相手のことを聞き、その後で全員に対して自分がそのペアの相手になりかわって自己紹介するという形式のものである。これが非常に盛り上がり、歌うのが趣味だという者には学生たちから歌うようにリクエストが湧き起こって実際に歌ったり、ヒップホップダンスを踊る学生も現れた。現在の学生の多才ぶりには大いに目を見張ったことであったが、これではじけてあっという間に親しくなり、次回からは何人もの学生が昼休みから教室に集まって一緒にお弁当を食べている光景が見られるようになった。また、方言がテーマの授業なので、出身地も含む受講者名簿を配り、学部学科の所属と氏名を書いたネームプレートも作って机の上に毎回置くようにした。

各回の授業は例によって三人の学生が教科書の自分の担当箇所を事前に読んでパワーポイントを準備して皆に分かりやすくプレゼンテーションするというものであった。司会も学生が担当した。質問は学期中に少なくとも通算 6 回はすることを単位取得の条件としたが、このクラスは非常に活発に質問を出し、いつも 10 人くらいの学生が手を挙げて、司会の学生がさばくのが大変なくらいだった。質問の内容も良質のものがとても多かった。発表した学生がそ

の場で答えられない質問も多かったが、私が適宜コメントを入れ、また次回までに調べてくるように課題にした。

そのようにして、学期の前半は教科書の内容を吸収して「言語地理学とは何か」を理解することを主眼とした。今学期の新たな試みとして、後半には ArcGIS を使って学生たちが自分で方言地図を描き、それに対してプレゼンを行う課題を出した。基礎資料は平山輝男編『現代日本語方言大辞典』明治書院、1992-94 のアから一語ずつ分担した。描図ソフトとしては当初はフリーソフトの MANDARA を使用しようと思ったが、本学は ArcGIS が全学で使えるようになっているという極めて有利な条件があるので、これを利用しない手はないと思い、ArcGIS による言語地図作成のマニュアル数ページを起草し、Aoyama-Portal を通してファイルを配布した。ワードやエクセルのファイルを学生に配布できるシステムの存在があつて非常に助かった。また、ArcGIS のプレゼンは教科書を離れたものなので、パワーポイントのハンドアウトをカラーコピーで配布したが、これもカラーコピーが安価で使える時代ならではであった。

本来、ArcGIS は非常に高度な機能をもったソフトであり、一学期の授業を受けて使用可能になるくらいのものである。だが、こと言語地図作成に限れば使用する機能は限られており、私が授業で 30 分ほど模範操作をして見せ、あとは学生たちが自分たちで大学のパソコンでマニュアルを元に ArcGIS を使い、すべての学生が何とか言語地図作成に成功した。

本来は専門課程の学生に課すような課題を一年生に与えるのは大変な冒険であつたが、これには伏線がある。京都大学文学部の木津祐子教授が 2003 年度と 2004 年度に「中国語学概説」の課題として中国語方言地図作成を学部 2 年生に出し、立派な地図集に実った成果を見て感銘を受けたことである。日本語方言ならば学部 1 年生でも十分に扱えるだろうことから、半期科目ではあつたが実行に移した。一番はじめに方言地図を完成した学生が出たときには流石に私も嬉しかった。分からないことがあつた場合はメールを出せばサポートする、と言っておいたが、実際には数名の学生から問い合わせがあつただけで、

あとは自力でできるようになった。

3. 学生の感想

以下では、学期の最後に学生にこの授業のよかった点・改善すべき点を書いてもらった。それを順不同で逐一箇条書きにし、→の後に私のコメントをつける。

- ・円になって授業するの、とってもいいと思います。
- 2009 年度前期の学生の提案で、椅子を円形に並べ替え、質疑応答がしやすい雰囲気を作っている。授業の前と後に学生たちが椅子を並べ替える手間がかかったが、ディスカッションを主体とする授業のためにはじめから円形に座席が配置されている教室を設けてもよいと感じている。
- ・方言の授業ということで、毎週張り切って”東北代表”やらせて頂きました！あまり美しい方言ではなかったかもしれませんが、皆さんの質問に答えられて良かったと思っています。また、多方面の方言を知ることができ、良い機会となりました。これからも、方言を大切にしたいです。
- 全国から学生が集まっているので、それぞれの出身地の方言話者にできるだけ情報提供してもらうことにしていた。
- ・少人数だったこともあり、多くの意見が出て、それを共有することができたと思います。自分では想像もつかないような質問だったり、また何気なく思ったことがとてもよい手がかりとなる質問だったりに興味があるものでおもしろかったです。
- ・日本全国の方言の分布など全く知らない領域に関して多くの知識を得ることが出来て楽しかった。7 月に入ってから、この語形の変化は前回のものと似ている、などと、生かしていくことができたのが面白かった。プレゼンで発表するという貴重な経験もできて良かった。
- ・単位を気にせず、楽しんで授業に参加できた。知らない学科の人とも知り合えて良かった。
- ・すごく楽しかったです！各自 1 回方言についてのプレゼンをして、それにつ

いてみんなで討論しあえて、とても発言が活発で良かったです。自分以外の人の意見を知ることができて、より考えを深められた。授業で方言CDをきいてみたりなど工夫があったのしかった。ただ、Arc GISは私は使っていないけど、他の人がつくるの大変そうにされていて、ちょっとかわいそうだった。でもこの授業をとって本当に良かったです！

→ 34名受講生がいたので、前半の6-7回は教科書の要約、後半の6-7回はArcGISで自分で方言地図を描図してプレゼンする、というふうにしたため、約半数の学生は描図していない。

- ・自分が地方出身なので、この授業はとても楽しかったです。方言の元の言葉の発生過程や時代についてももっと詳しく知りたかったです。
- ・すごく楽しくて勉強になりました。色々な地方の人がいるので色々な方言を聞けたり、共通語だと思っていたことが実は方言だったり、新しい発見がたくさんあって楽しかったです。挙手制度はあった方がやりやすいです。

→ 質問を学期中に6回以上出すこと、というのを単位取得の条件の一つに掲げた。それで、ときどき自分は何回質問しているか私の付けている記録を見に来る学生がいたり、最後の日に連続していくつも質問を出した学生がいた。その学生はそれ以前ほとんど質問を出さなかったのだが、最後に単位取得のために一念発起したというわけだ。それがなかなか良質の質問であった。ところが、一番最後の日の始めのプレゼンのときに、実はこれは全員がまんべんなく質問を出すようにし向けるための一種の方便であって、単位取得を餌にして学生を誘導するのは私の本来の趣味では全然ない、と言ったら、次のプレゼンから質疑応答で手を挙げる学生が出なくなってしまった…。皆さんそんなに現金な動機で質問を出していたんですか、私がこの授業で伝えたかった重要なメッセージの一つは学問は単位とか成績のためにするものではなくて、自分の生き生きとした知的好奇心で学ぶことだ…ということだったんですがね〜、と学生に言ったら、「先生ごめんなさい」という学生もいた。まあ、ゲームのようにして競い合う雰囲気を作るという意味でこのルールはとても有効であったとは言える。

- ・質問を 6 回する、という取り決めが議論を盛り上げていて良かった。
- ・質問の義務化のおかげで活発な意見交換ができて、とても「生きた」授業で楽しかった。1 人 1 人が能動的で真剣にプレゼンを聴いている雰囲気の中に居るだけで、自分も身の引きしまる思いだった。質問の内容も、私にはない発想のものが多数あり、みんなの着眼点のおもしろさに感心しきりだった。

そういった空気が当たり前だったので、発表者の側も「やりさえすればいい」というような姿勢ではまずく、聞き手からの質疑も予想しながら、細かく、深くまで調べ、下準備をした上でのプレゼンを作成していたと思う。とても充実した授業でした。

→とにかくやる気満々の学生ばかりのクラスだったので、切磋琢磨できたと思う。

- ・大勢の前で発表する機会をもててよかったと思う。内容が方言で発表を聞いたあと「ふーん」というかんじで質問があまり思いつかないので、教科書の内容をそのままそっくりプレゼンにするのではなく、関連したことも自分でとりこんでもっとおもしろいプレゼンにしたら興味がわいて質問しやすいし、作っているほうも楽しくできると思う。席を円にするのはよかったと思います。

→以前のクラスでは個性とオリジナリティーを重視するので、自分の視点もできるだけ交えてプレゼンを準備してください、と事あるごとに強調していたが、このクラスは初めから盛り上がっていたので、その辺の注意がやや足りなかった点は否めない。

- ・グループに分けて、皆で一緒に協力して、すこし大きい課題を発表したりとかしたら良いと思います。社会の新しいことや、今人々の関心あることにかかわるテーマをやってみたらどうでしょうか。いろいろな地域や国の人に入ってもらえば、もっと違う意見が出るかもしれません。

→グループ学習については 2009 年度前期にも学生から提起されていた課題で、未実行である。また、テーマについてはフレセミ全体としては社会科学系の課題のものが多く準備されている。むしろ社会科学系や理科系の学生も人文

系のテーマを学ぶ、というのが学部の枠を超えたこのフレセミの妙味の一つであろう。

- ・一方的ではなく生徒同士での話し合いができるので楽しく授業を受けれた。
 - ・こんな言葉にも方言があるのか！という言葉にも興味深い方言があってとてもおもしろい授業であった。青スタ科目なのでいろいろな学部・学科からきている生徒と話すことができ、友達ができてたのしかったです。6回以上質問しなくてはいけないというルールがあったのでみんな積極的に質問していて盛り上がっていて毎回授業がたのしかったです。
 - ・こんな風に色々な地域の人と活発に意見が交換できて本当に楽しかったです!! パソコンはほとんどやったことがなく難しかったです。勉強になりました。質問をする場面がある事で授業に積極的に参加できたし、大学で受ける必修以外のものでは一番たのしかったし、授業に真剣に取り組みました。こういう授業がもっとあればいいのになぁと思います。
- 日本の学校では「学問」のうち、「学」ばかり強調されて、「問」がないがしろにされている、というのが私の持論だが、このフレセミでは一貫して「問」のほうにも重きを置いている。実際には学生たちに質問を出させると、とても鋭い本質をついたものが続出して驚かされる。岩波新書を教科書にしていた年度など、結構突っ込みどころが多い本だったのだが、学生たちはきちんとそうした問題点を突いていた。
- ・最初から方言のこの授業を取りたかったのですが、人気の授業だったので取れるか不安でした。取れたからには、消極的にならず自ら進んで取り組もうと思いました。ArcGISは入学する前から使ってみたかったのですが、現代デザイン学科でしか使わないようだったので今回体験できてとても良かったです。経済に関してではなく、文学的な内容にも使えると知りさらに興味が沸きました。
 - ・様々な地域からの人が集まっており、あらゆる意見・文化を聞くことができ、よい刺激になった。個性豊かな発表が見られ面白かった。
 - ・今回フレッシュャーズセミナーを受講して、本当にこの授業を履修してよかつ

たと思います。机を円状にして、発表者を中心に全員が意見を活発に飛び交わすことができるのはフレッシュャーズセミナーならではの良い所だと思います。また、初回の授業の自己紹介はクラスの輪を深めるとても良いもので、大学に入ったばかりの一年生にとっては緊張が解けるものでした。

- ・席を円にしていることで、いつもと違う感覚で授業を受けられる。プレゼンは大切。手を挙げさせる工夫は良い。
- ・前半の授業で得た知識をもとに各自が ArcGIS でつくった方言地図を考察できた点に面白味を感じた。地方から上京した方がいると議論に深みが増して有意義な授業になった。その一方で、首都圏の方も地方の話聞くことができ、とても楽しむことができると思った。方言の桃太郎の録音を聴かせることと ArcGIS 作成はこれからも続けていってください。とても楽しくてタメになりました。

→ ArcGIS で地図作成に取り組む段階になった途端に、出てくる質問が深いものになった。やはり自ら一次資料を使って作図するというタスクに取り組むと、どのように解釈したらよいか具体的に考えるようになる。そのことから、既成の地図を読み取るに際しても、それが初めから客観的に与えられたものではなく、描図者の解釈を経たものであることが分かり、別の解釈の可能性も大いにありうることが会得できるようになったようである。教科書に出ている結論を鵜呑みにするのではなく、自ら一次資料に立ち返って考えなおす、という訓練ともなったと見受けられる。

- ・ ArcGIS を生徒に挑戦させた点がとても良かったと思います。教科書の要約のみのプレゼンテーションだけでは、これ程内容が濃くならなかったと思います。授業の私語についてですが、時に授業の妨げになる事もありますが、授業のテーマが“方言”なので、活発な議論のためにも工夫があると、さらに良くなると思います。しかしこのセミナーの中で新たな発見が多くありました。

→実は 7-8 回目くらいの授業から授業中の私語が目立つようになった。これはパソコンの設定をしているときの空き時間や、発表最中に内容について自分

たちで自分の方言ではどうだ、ということを情報交換しているようだった。数回は単に静かにするように注意していたが、改善しなかったので、今後は私語をしている場合は総合成績から減点します、と言ったら改まった。上にも記したように、成績評価を元に学生をコントロールするのは全く趣味ではないのだが、効果てきめんであったので、これまた一種の方便としての策であった。

- ・人数が少ないこともあり、自分の意見が言いやすかったです。とにかく楽しかったです！内容も親しみやすく、良い先生に会えて本当に嬉しいです。
- ・予想と同じような授業内容で、興味を持って意欲的に授業参加ができた。充実した授業だった。とてもよかったです。
- ・私がフレッシュャーズセミナーを受講した理由は、他学部の友達と接することのできる機会は今後多くないのではないかと思ったからです。最初テキストを読んだ時はテキストの難しさにとてもおどろきましたが、友達の発表などを通して、理解し、知識として蓄積していくことができました。また、プレゼンテーションも楽しく、どのようにまとめたら相手にわかりやすく伝わるかなど、とても勉強になりました。様々な出身者がいて、異なる風習にふれることができたのも楽しかったです。
- ・たのしかった！テーマがすごくいい！先生が物知りなので、新しいことがよくしれたし、授業がぐだぐだしなかった。出欠をとらないけど、ヤル気のある人ばかり集まるので、ちゃんとみんな授業にでるし、たのしい話し合いになる！
- ・今まで習ってきた「国語」とはちがって、言語として日本語の特徴を研究することができて楽しかった。ただ、今でも私たちが使う方言はたくさんあるのに取り上げられるものはもう絶滅してしまったようなものばかりだったのでリアルな言語を聞くのは難しかった。
- これは標準語以外のものは全部まちがった訛ったものである、という見方ではなく、日本語史の全体から見るとむしろ方言のほうに由緒正しい古い形が残されていることがある、といった学問的な見方に接することができた、と